P2-511 慢閉鎖症、処女膜閉鎖症に対するGranjon手術
久留米大
藤本昭治, 古質文敏, 今石裕人, 村上文洋, 藤吉啓造, 鳳橋公生, 嘉村敬治
【諸説】Granjon手術は陰部横隔膜症において、産後の再狭窄を防止するために考案された手術である。その方法は、側面の前壁にCrozier切開を加え、その後方の髄骨をを利用して結合する方法である。今回、腹閉鎖症2例、処女膜閉鎖症1例に対してGranjon手術を施行したので、その結果を報告する。症例15歳、0歳時に先天性腹閉鎖症で手術の既往がある。前宮にて腹閉鎖症の診断で外科的治療を受けたが、感染、再閉鎖を繰り返していた。当科を受診時、腹閉鎖症、子宮粘膜血症を呈していた。当院を当科と同時に腹閉鎖症に対してGranjon手術を施行した。術後2日間のみプロテーゼ挿入を行い、再閉鎖を繰り返すが、再狭窄挿入の再狭窄を繰り返す場合は、予防対策として予防対策を施行した。当院を当科と同時に腹閉鎖症に対してGranjon手術を施行した。術後2日間のみプロテーゼ挿入が行われたが、再狭窄挿入が行われた。【結論】Granjon手術は処女膜閉鎖症では十分な手術であると考えられた。しかし、腹閉鎖症では、狭窄の部位、狭窄の範囲、前治療の有無などが、術後再閉鎖、再狭窄のリスク因子と考えられ、術後も十分な管理が求められる。

P2-512 当教室で阀腔鏡下手術を施行した子宮奇形症例の検討
順天堂大
島貫洋人、小泉邦博、黒田常司、小林優子、熊切順、菊地盤、北出真理、武内裕之
【目的】子宮奇形はミュエーリ管の発生異常により生じる。なかでも外科的治療を要する奇形は、剖診学的構造が複雑であることが多い。診断および手術療法は客観性が多い。当教室で腹腔鏡下手術を施行した子宮奇形についてretrospectiveに検討した。[方法]2006年6月までに診断した子宮奇形（ASRM分類6、Ⅴ型は除く）で、併用は1型17例（13%）、Ⅱ型18例（14%）、Ⅲ型37例（29%）、Ⅳ型14例（11%）、Ⅴ型12例（33%）であった。そのうち腹腔鏡を施行した症例は37例であり、対象とした。画像診断のMRI矢状断、横断、冠状断の3方向を撮影した。[結果]初診時の平均年齢は20歳（7歳）であった。全例前MRIで子宮奇形の診断が可能であった。術式の内訳は、観察のみ12例（うち2例は子宮頸下部隔断術併用）、Davydov手術5例、子宮角摘術4例、症例11例、子宮内膜症手術10例（うち4例は症例11例）、腫瘍隔断切除術併用）であった。子宮内膜症発症症例（子宮内膜症症例、発症症例）はそれぞれ、1型（1/6,17%）、Ⅱ型（3/7,43%）、Ⅲ型（8/16,50%）、Ⅴ型（3/8,38%）であった。腫瘍または子宮頸部の閉塞を伴う症例は9例で、うち5例に子宮内膜症を認め、母乳塞症に対して再開症が高かった。【結論】閉塞性子宮奇形は子宮内膜症の合併が高率であることを月経血の逆流が関与していことを示唆された。術前MRIにより複雑な子宮奇形を正確に診断でき、閉塞性なく再開症下手術が施行できた。

P2-513 産婦人科医が関わる児童性的虐待についての調査
防衛医大
田中雅子、松田秀雄、芝崎智子、川上裕一、長谷川ゆり、吉田昌史、吉永洋輔、古谷健一
【目的】近年児童虐待の報道数が増加し、それについて性的虐待の数も増えてきている。今まで産婦人科医が関わる児童虐待で主なもののは出産前後における母子関係であった。しかし今後は性的虐待の被害者としての児童との関わりも多くなることが想定される。性的虐待が他の虐待よりも隠蔽されやすい性質を持つため、われわれは治療者としてだけではなく、医療者、通報者、精神科医、社会福祉などの役割を果たすことが必要である。当教室での性的虐待による宮内麻薬、出産を経験した際、知識や経験の不足を感じた。児童に対する性的虐待の施設数を数値化し、今回の症例をケーススタディとしてどのような公的支援が受けられるかを考察する。【方法】埼玉県内7箇所の児童相談所にて質問紙形式でアンケートを入手した。不十分な点は電話で詳細に質問し、回答を得た。【結果】全虐待のうち性的虐待は3.7%を占め、このうち虐待の重度症を5段階で見ると、生命的危険あり0%、重度虐待14.2%(11例),中度虐待50.9%(41例),軽度虐待23.3%(19例),虐待の疑い11.6%(9例)であった。性的虐待の被害者は男児25.4%、女児75.7%と男児への虐待はあるが症状的に女児に多い。小学生32.5%,中学生36.8%,高校生27.7%と高学年になっても虐待の被害者となる傾向があった。【結論】虐待一般に関しては社会での認知度が高くなるにつれて報告数が増加しており、早期介入される症例も増えていた。一方で性的虐待は社会での認知度も高くなく、被害者を沈黙する傾向があるため実数の把握は非常に難しい。しかし性的虐待は性感染症、妊娠、中絶といった身体的被害のみならず精神的被害も大きく、正確な知識と適切な対応が必要である。